

起舟きつしょう

起舟とは、吉初、吉祥とも表し、元々、加賀藩では、北前船の船出祝いをさすものであったが、海運が無くなった後は、漁師の仕事はじめの行事として行われてきた。安宅では、昭和四十年（一



安宅住吉神社での大盃飲み廻しの様子

九六五）頃まで、カマスやフクラギなどを対象とした地曳じびき網漁が、盛大に営まれ、網曳あみには、三〇名位の漁夫がこれに参加したという。この漁は、春、秋を中心に、四軒の網元により経営された。

毎年二月十一日の起舟祭は、漁の仕事はじめとして、各網元家に漁師を集めて、盛大に行われた。この日は、網元と網子との契約の意味もあり、昼すぎに網元のあいさつを皮切りに、ヒイカやニシメなどの馳走を盛った高膳が網子に振舞われ、江刺追分を唄ったりの宴会が催された。

網元のそれぞれの家で行わ



安宅住吉神社遠景

れていた起舟祭も、平成元年（一九八九）頃からは、安宅住吉神社で合同で行われている。祭当日は神主の祝詞の

後、三升入の大盃を参加者が廻し呑みをする。秋祭り（九月七〜九日）には、海運当時に行われていた「帆柱おこし」



安宅祭り当日の曳舟行事の様子

や明治三十四年（一九〇二）頃からはじまり、一時中断していた曳舟（曳テンマ）の行事も昭和三十五年（一九六〇）より再興され、現在は曳船保存会の人たちによって、長さ七^{メートル}、幅二^{メートル}の伝馬船に帆をかけ、七福神を乗せ、木やり歌にあわせて、町中を練り歩くようになった。安宅地方の一大漁師祭として、人々に伝えられている。

（高桑守史）



曳テンマ